

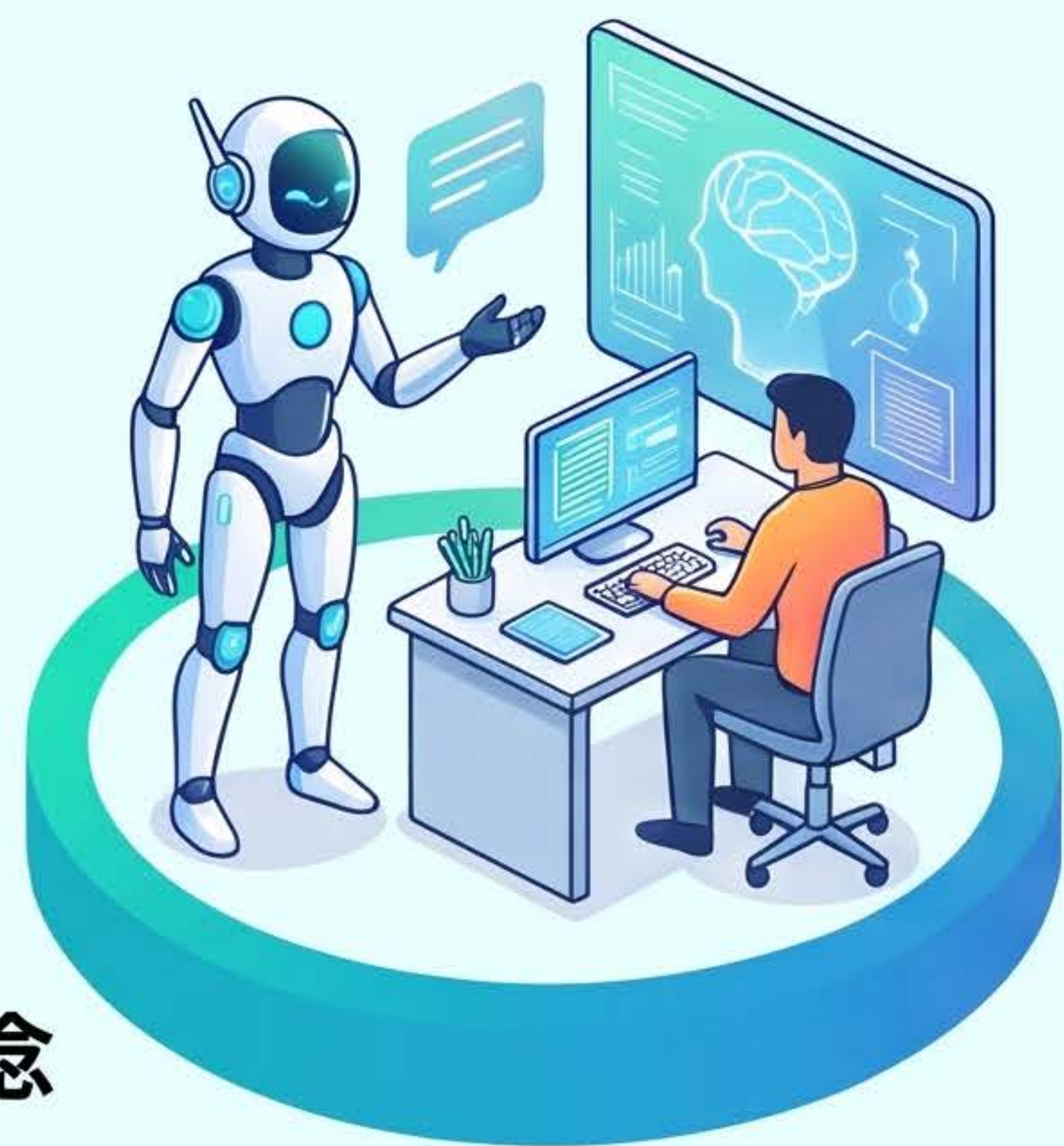
生成AIによる発明発掘・創出の進化：2025年 vs 2026年比較

知財分野における生成AIの役割が「単なる文書作成」から「業務プロセスへの深い統合と連携」へと進化

2025年：効率化とツールの登場

発明内容の「文章化」と「エージェント化」

-  発明アイデアの整理や提案書の自動作成
-  特許分析の自動化が普及し始めた



人とAIによる「共創」の概念



AIが提示した発想に対し、人間が追加の創作を行う協力体制が模索された

2026年：具体化とプロセスへの統合

研究開発（R&D）と知財のシームレスな接続

-  研究資料や対話から不足情報をAIが特定し、埋もれた発明を能動的に掘り起こす
- 研究AI就業妻期にからのためピクラを知識的な類醸成し、手敏な投が実現



複数LLMによる議論と周辺発明の生成



複数のAIを競わせる手法や、基本特許から短時間で周辺特許網の案を作る機能が登場

2025年の状況 vs 2026年の進化

2025年の状況		2026年の進化	
発明発掘の質	既にある情報の文書化が中心	発明発掘の質	不足情報の提示・部門間の連携強化
発想の手法	単一AIによるアイデア生成	発想の手法	複数AIの議論・周辺特許案の展開
システム接続	スタンドアロンなツールが生流	システム接続	MCPサーバー等による外部DB・実務接続



実務ノウハウのサービス化による50%の工数削減

事業会社が自社で培った知財AIノウハウを外部提供し、具体的な削減実績を公表